

神戸シルバー大学院研究報告 47

次世代につなぐ里山を目指して  
— 取り戻そう “里山に賑いを” —



あいな里山公園（切通しから相談ヶ辻の家を臨む）

2020. 2

グループ名 里山守り隊

石原 清（15期生）

石井 由起子（15期生） 雑喉 良（16期生）

寺本 孝子（15期生） 内藤 マサヨ（15期生）

藤本 靖子（15期生） 山川 瑞子（専科）

## 目次

はじめに	4
第1章 次世代につなぐ里山を目指して	5
第1節 里山とは何か	
第2節 里山が衰退した理由	
第3節 里山の活性が必要な理由	
第2章 里山をテーマの対象にした里山守り隊7人衆	6
第1節 メンバー紹介	
第2節 各自の里山への思いについて	
第3章 フィールドワーク重視の活動経緯	7
第1節 私たちの里山への取組の基本的な立場	
第4章 武庫川ウォッチングに参加して	8
第1節 武庫川ウォッチングに参加した理由	
第2節 魚道の現状	
第3節 川と海の密接な関係	
第4節 フィールドワークでの注意点	
第5章 典型的且つ先進的な里山の見学から得た里山の展望	9
第1節 先進的な里山の現状	
第2節 ブランド化で製品差別化を推進	
第3節 消費者の価値観を変えることが肝要 ～価格優先から品質重視へ～	
第4節 新たな薪炭需要を作り出す方策 ～バイオマス発電の普及～	
第5節 竈で炊くご飯の効用	
第6節 他地域に見る木材活用策をヒントに	
第6章 獣害問題を考える	12
第1節 神戸市における獣害の現状	
第2節 獣害対策の有効な対策は現状では電気柵のみ	
第3節 電気柵の問題点と課題	
第4節 近年獣害が深刻化した理由	
第5節 ジビエ料理の普及と課題	
第6節 農林業への国・自治体の補助に対する国民的合意が大事	
第7節 獣害問題に潜む看過できない問題点	
参考資料 兵庫県のエホンジカ被害	
第7章 かいぼりに参加し、生物多様性を考える	17
第1節 かいぼりの目的と効用	
第2節 かいぼりをめぐる近年の状況	
第3節 文化の違いと価値観・常識に捉われない発想が大事	
第8章 竹林や放置林の伐採・間伐に挑戦	18

第1節	あいな里山公園で竹林や里山林の伐採に従事	
第2節	里山の持つ国土保全機能の重要性	
第3節	国土保全機能の正当な評価と補助・助成への理解	
第4節	自然素材としての竹の皮の見直し	
第5節	時代の変化に伴い里山が荒れる意味も変わる	
第9章	ホタルが乱舞する環境づくり	20
第1節	ホタルの乱舞は見ることができず	
第2節	ホタル復活の可能性はあるのか	
第3節	ホタルの乱舞の効果	
	グループ研究 神戸山手大学吉岡英二教授研究室の訪問記録、見学と講義	
第10章	里山をもっと知るために ～まずは身近な里山から～	23
第1節	あいな里山フレンズとしての活動	
第2節	都市住民とあいな里山公園の絆を深めよう	
第11章	今後の展望と提言	24
第1節	里山は生物多様性の宝庫	
第2節	里山の持つ多面性	
第3節	都市住民と里山住民との交流推進及び里山への資金還流体制作り	
	(1)NPO 法人「里地里山問題研究所」の取組	
	(2)任意団体「農都共生ネットこうべ」の取組	
	(3)奈良県明日香村と大手マンション建設会社の連携による新たな「二拠点生活」の提唱	
	引用観察記録等 あいな里山公園里山フレンズいきものグループ作成	
	引用論文「土井敏夫(2018)兵庫陸水生物、No.69:13-18より抜粋」	
	参考資料 (株)長谷工コーポレーションと官民連携に関する包括協定書	
おわりに		33
謝辞		34
引用論文等、参考文献、参考資料、講義・指導		34
里山守り隊で学習した感想		35

## はじめに

私たちが「里山守り隊」を結成した経緯は、以下の通りである。

KSC(神戸市シルバーカレッジ)の時、グループ学習として“魅力あふれる伊川を求めて”～「呼び戻そう 人と自然」をテーマに、神戸市西区伊川谷町を流れる伊川に生息するいきもの調査や環境調査、さらには伊川をめぐる文化や歴史にも触れて、伊川をグループ学習の対象として選んだ。

そもそも伊川を対象に選んだ理由は、子供たちが伊川で遊ぶ姿をあまり見かけることがなかったことによる。「子供は風の子」と言うように、戸外で活発に遊ぶのが子供本来の姿だと思っていたが、現実には川遊びをする子供を殆ど見かけないのに気づいた。それは伊川がきれいな川ではなく、いきものが少なく魅力に乏しいからだろう、と最初はそう考えた。だが、神戸市のアカミミガメ防除に協力してアカミミガメの捕獲をする中で、意外にも多種多様ないきものが結構生息することが判った。カワムツ、ウナギ、ナマズなどの魚類はもとより、たまにしか獲れなかったが在来種のイシガメもいることが確認できたし、他にクサガメやスッポンなどのカメ類も生息を確認できた。

現代の子供たちは放課後は塾通い、稽古事と大変忙しい。缶蹴りや鬼ごっこをする子供たちの姿を見かけなくなって久しい。自由な時間は専らゲーム遊びに興じる。視力は悪化し、運動不足は明らかだ。昔の小中学生に比べてボール投げや持久走、短距離走でも運動能力が大幅に落ちている。せめて子供時代はへとへとになるぐらいまで遊んでもらいたいと、勝手な願望を持っていた。私たちが長靴を履いて川に入り込んで玉網で魚を獲ったり、ザルで底生動物を掬う姿を見ればやがて子供たちの中にも川遊びに興味・関心を持つ者が現れるだろう、という思いで私たちが川遊びを楽しむことにした。

このように私たちは自分たちが童心に返って嬉々として伊川での活動をする中で、興味の対象が川だけでなく、それらを構成する周囲の自然環境にも広がった。伊川の源流はどこだろうか、そこはあいな里山公園にあった。あいな里山公園は広く、広葉樹や竹林も多い。都会では見られない貴重な動植物が生息、生育していることも分かった。それで興味は里山にも広がった。他方、川を下流に目を転じれば海に流れ込み、改めて川は川だけで成り立つものではなく、海とも大いに影響し合うものであることを実地に再認識できた。

その結果、里山をテーマにしようと考えた。当初、賛同者は少なく筆者と藤本靖子(以下「藤本」という。なお、すべてメンバーの氏名は姓のみの敬称略とする)二名のみだった。それがいつしか入会希望者が増え、現在の総勢7名になった。メンバーの里山に対する思い入れや興味や関心のある分野は各自異なる。それについては後述するのでそれによるが、里山が置かれている現状を何とか改善したいという思いは共通である。

即ち、少子高齢化の波は里山を擁する地域に特に顕著な影響を及ぼし、限界集落は珍しくなく、下手をすれば近い将来「消滅集落」にさえなりかねない。微力な私たちにできることは限りが有るが、何とかしてそのような消滅集落を発生させない歯止めとなるために、里山に賑いを取り戻せるような仕組みを構築したいと願っている。そんな里山の活性化に貢献できる一助となるならば、老体に鞭打つのは私たちにとって愉快なことこの上もない。

## 第1章 次世代につなぐ里山を目指して

鬱蒼として薄暗い放置里山林

整備され木漏れ日が入る明るい里山林



### 第1節 里山とは何か

私たち里山守り隊のテーマは、「次世代につなぐ里山を目指して」である。

初めに里山とは何かを説明しよう。一般に人があまりいない「奥山」に対して、人が住んでいる里に近い農用・生活用林を里山と言う。人間の手による攪乱や改変等で、その領域が成立するのが特徴である。具体的には水田、畑、川、ため池、湿地帯、鎮守の森、棚田、農家住宅等が織りなす自然景観全体を里山と呼ぶ。

### 第2節 里山が衰退した理由

昭和30年代半ばの燃料革命により、それまで利用されてきた薪や炭が使われなくなり、里山放置林が増加した。そこに住む人々がこれまでのように里山の手入れをしなくなったからである。その結果シカやイノシシ、サルなどが農作物を食害する獣害が年々深刻になっている。それと相まって耕作放棄地が年々増える現実もある。そこで私たちは放置された里山を何とか活性化したいという思いで、このテーマに挑むことにしたのである。

### 第3節 里山の活性化が必要な理由

現状を放置するに任すと、近い将来、日本の多くの里山を擁する中山間地域が限界集落から消滅集落になると国土保全や防災の面でも危うい状況に陥る。童謡の「故郷（ふるさと）」にもあるように、「ウサギ追いし彼の山、コブナ釣りし彼の川……」と続く歌詞こそ、端的に日本人の郷愁ともなる里山を象徴している。それを喪失することは次世代の子供たちの健全な成長にとっても、計り知れない大きな損失となる。

次代を担う子供たちに自然豊かな里山の環境、そこで育まれた文化を継承することこそ私たちに課せられた使命ではないだろうか。大仰に申せば、それこそ後世に伝えるべき国民的財産に他ならないのではないだろうか。そう考えれば私たちの活動が少しでも役に立てば望外の喜びである。

## 第2章 里山をテーマの対象に参集した里山守り隊7人衆

里山を源流とする伊川 管理が不十分な里山を流れる伊川 シカに剥がされた樹木の根



### 第1節 メンバー紹介 (50音順)

石井由起子、石原清、雑喉良、寺本孝子、内藤マサヨ、藤本靖子、山川瑞子

私たちの里山に対する取組の動機はそれぞれ異なる。石原は生まれ育った環境からいきものに対する興味や生物多様性に強い関心がある。また、獣害について学び、効果的な予防策を講じたいと考えるのは寺本、更には雑喉は諸問題を抱える里山を何とか活性化したい、あるいは里山に産する山菜など自然の食物に興味を持ち、次代を担う子供たちに食育の大事さを伝えたいという石井、また野山に咲く花や薬草に魅せられた山川、そして幼少期の里山暮らしを懐かしむ内藤、藤本という布陣である。しかし、里山が持つ魅力を取り戻し、活性化したいという思いは全員が等しく持っており、私たちはワンチームで活動してきた。

しかし、一口に「里山問題」と言ってもアプローチの仕方は様々である。私たちは以上に述べた各々の得意分野、興味のある分野を各々が学習し、それを全員にフィードバックして知識・情報の共有化を図って互いにスキルアップすることを心掛けた。

### 第2節 各自の里山への思いについて

人は生まれ育った環境がその人格形成に大きな影響を与えることが多い。もちろん「孟母三遷」の教えが説くまでもなく、親の教育によって後天的にも強い影響を受けることは否定できないが、生まれ育った自然環境がその人の成長にとって重要な要素となる。

石原を例にとると、生家の裏にすぐ川があり、また子供の足で数分も歩くとバッタはじめ多くの種類の虫が生息する野原があり、少し足を伸ばして30分ほど歩けば神社の森があり、そこには小さな池もあった。だから、生まれついて昆虫や魚などのいきものに関心が強かった。長じて溪流釣りを愛好するに至ったのはごく普通の成り行きだったと言えよう。

里山に多くの多様な生物が生息・生育できるような環境を取り戻したいというのが石原の思いはそのようにして育まれたが、他のメンバーも同様に、各自の生まれ育った環境が里山への関心を生ぜしめたことを異口同音に語ったのは興味深い事実である。

### 第3章 フィールドワーク重視の活動経緯

実践活動を通じて現状把握し、問題点を解決する  
～書を捨て里山に出かけよう

SGS 里山守り隊主なフィールドワーク				ミーティングを除く
No.	日付	活動内容	場所	備考
5	17/9/20	あいな里山公園高畑園長講義①	あいな里山公園会議室	あいな里山公園の概要とめざすもの
6	17/10/8	武庫川ウオッチング	武庫川上流部 JR藍本～草野	武庫流会主宰のFWに参加
7	17/10/14	日本造園学会関西支部大会	相楽園（高畑園長参加推奨による）	里山シンポジウム
8	17/10/24	兵庫県森林林業フォーラム2017	神戸芸術センター、生田川公園他	減災研究からの森づくり
9	17/11/17	あいな里山公園高畑園長講義②	あいな里山公園フィールド主体	あいな里山の暮らしを考える
10	17/11/18	里山公開講座	宝塚ホテル	
14	18.1.13	あいな里山公園高畑園長講義③	あいな里山公園情報館座学+フィールド	里山林について+伐採体験
15	18.3.3	あいな里山公園かいぼりスタッフ	あいな里山公園 盆処西池	ニホンアカガエル調査・ヒメガマ堀
17	18.4.8	春・身近な自然観察会	かがやきの森/東地区	グループわ里山和楽会主催
18	18.4.15	武庫川ウオッチング	武庫川団地駅～潮止め堰～2号床止め	武庫川アユ遡上観察
23	18.6.26	あいな里山公園高畑園長講義④・第8回会議	同上	
24	18.7.1	武庫川ウオッチング	武庫川下流・干潟観察	
28	18.8.11	あいな里山「獣害とジビエ料理」	あいな里山公園	あいな里獣害観察と講義とジビエ料理いただく
31	18.9.12	あいな里山公園高畑園長講義⑤・第10回会議	あいな里山公園・しあわせの村研修館	あいな里生き物、植物調査
37	18.12.12	ガオー制作会		制作は女子全員
41	19.2.24	あいな里山公園かいぼりスタッフ	あいな里山公園	かいぼり作業
42	19.2.17	武庫川ウオッチング	黒川地区	黒川の里山 自然観察会
46	19.4.19	生きもの守り隊と合同川調査	中白川他明石川水系上流部	環境調査・生き物調査
51	19.7.12	ホテルについて講義	山手大学	吉岡先生の講義
53	19.8.10	里山フレンズ定例会・高畑アドバイザー講義⑥	あいな里山公園	あいな里山公園での里山問題取り組みについて

#### 第1節 私たちの里山への取組の基本的な立場

そこで私たちは里山を活性化するためには現実にはフィールドに出て活動することを重視した。百聞は一見に如かずである。それがこの表でお分かりいただけると思う。即ち、現場重視である。

実際に野原や川、里山に我が身を置いて、周囲の光景を自分の目で見て肌で体感したりすることによって、里山への思いはより増幅された。匂いを嗅いだり、更には口にしたりすることで身体全体、五感で体験することは書物で得た知識とは異なり、より深く印象に残るものと確信する。これら私たちの活動が子供たちへのサポートとなる事を願う。

かいぼり作業をする中で、池底に堆積した汚泥の重さを実感し、泥に足を取られて独力では抜け出すことが出来なくなり、恐怖感さえ覚えた子供もいたことだろう。それで池にはいろいろないきものが棲む楽しさと同時に、対応を誤ると溺れ死ぬ怖さを知ること自然に対する畏怖の念も併せ持つことになる。

ザリガニが泥の中に潜り、生き延びる光景を目にした時、そのしたたかさを身を以って感じることが出来ただろう。何より、ため池の存在すら知らなかった子供たちの中から、たとえ一人でもそこに多くのいきものが生息する事実を知って感動し、この体験が後々の彼(または彼女)の里山に対する関心・興味を持つに至る原動力となってくれば、実に嬉しいことである

## 第4章 武庫川ウォッチングに参加して



### 第1節 武庫川ウォッチングに参加した理由

他の団体の観察会にも積極的に参加した。自然環境に対する研鑽を深め、併せていきもの観察会を通じて動植物についても知識を深める。具体的には、「武庫川づくりと流域連携を進める会」（以下「武庫流会」と言う）主催の武庫川ウォッチングに参加した。同会には動植物一般に詳しく、とりわけ昆虫については専門的知識を有する研究者も居られ、その他河川工学の専門家も居られるなど、学術的にも優れた会であり、得られるものが多い。

### 第2節 魚道の現状

写真左は国道2号線下流の堰堤と魚道である。「アユの遡上」観察である。遡上に大きな妨げとなる堰堤を人工的に魚道で解決できるかを検証した。コサギやカワウが待ち受けて食われる魚もいるが、上手く逃げ延びる魚もいて魚道が役立つことが実証された。しかし設置後メンテナンスが殆どされず、放置されているところもあった。

### 第3節 川と海の密接な関係

当たり前のことであるが、川は上流から下流へと流れ最終的には海に注ぐ。その過程で残念なことであるが、川岸や河口の護岸には上流から流されてきたゴミの中には現在、世界的に社会問題となり海洋汚染が深刻化しているマイクロプラスチックの素となるペットボトルをはじめ多くのプラスチック製品があったのを現認した。

### 第4節 フィールドワークでの注意点

写真中央は同じ武庫川であるが、三田市内を流れる藍本付近での「自然観察会」いきもの調査である。最近ニュースにもなった「マダニ」が印象的だった。自然と触れ合う場合、時として危険はつきものである。マムシやスズメバチと言った危険動物もいるので、長袖シャツ、長ズボンのいでたちで極力皮膚の露出を避けるのが基本である。

右のイラストは「里山」は川を通じて海ともつながりがあることを示す。森は海の恋人と言われる所以である。



## 第5章 典型的且つ先進的な里山の見学から得た里山の展望

台場クヌギ(川西市黒川地区) クヌギが育って生産された菊炭 早く美味しいご飯が食べたい



### 第1節 先進的な里山の現状

私たちのフィールド調査の主眼は里山である。そこで管理の行き届いた典型的な里山と言われる川西市の黒川地区を見学した。写真左は黒川地区の里山で見られる「台場クヌギ」である。伐採したクヌギの枝は成長が早く、概ね8~10年周期で更新する。その過程がパッチワーク状になるのが、手入れの良く行き届いた典型的な里山管理を示している。余談だが、台場クヌギにはオオクワガタが多く生息し、昆虫マニアの間では有名だった。しかし、残念だが乱獲され今ではかなり少なくなったという。

### 第2節 ブランド化で製品差別化を推進

写真中はそのクヌギを材料にした、茶道に使われる高級な「菊炭」である。断面が菊の花のように見えるのでそう呼ばれる。炭の縁が欠けると菊炭としての値打ちが下がるので出荷にも細心の注意が必要である。狭い茶室でもこの炭だと煙が出ないので茶道愛好者の評価が高い。その代わり値段はかなり高価である。したがって「黒川の菊炭」というブランド名は浸透している。他にも農畜産物や魚でも共通して言えることだが、いったん「ブランド」が確立されると生産者は価格設定において製品差別化で優位に立つことが出来る。「神戸ビーフ」、「南高梅」、「関サバ」然りである。日本の消費者は一般にブランド信仰が強いこともこのような動きを助長する。

### 第3節 消費者の価値観を変えることが肝要 ~価格優先から品質重視へ~

高価格、高品質でようやく菊炭の生産が細々と維持されているのが現状である。昭和30年代のエネルギー革命で「薪」「炭」の需要は殆どなくなったからである。いったん便利な生活を享受した現代人に昔の生活に戻れと言っても無理である。炭生産の経営は厳しい状況が続いている。消費者は商品を買う際の判断の目安として、価格だけではなく品質にも大いに目を向けるべきである。これは炭に限ったことではなく、有機栽培の

農産物などにも共通して言える。消費者の消費行動にこれからは品質重視の価値観の転換を願う。

#### 第4節 新たな薪炭需要を作り出す方策 一例としてバイオマス発電の普及～

薪や炭の新たな需要を掘り起こすことが最も重要な課題である。薪ストーブを利用しやすいような施策の推進、環境にやさしいということで購入に際し補助金制度を設けるなど一部の自治体では行われているが、全国的に広がることを期待する。また、安全性に大きな問題を抱える原発依存度の比率を低下させるためにも里山で得られる間伐材のチップを使うバイオマス発電が普及すれば、放置林の整備もできるという、いわば「一石二鳥」を考えてはどうだろうか。

無論、バイオマス発電で賄える発電量は原発のそれとは電力量で比較にならないほど小さいが、ローカルエネルギーとして有用なことは間違いない。安心安全な電力を供給源として、里山林の有効活用を図る意味でも、また原発の安全性に先の見通しが立たない現状、その結果、石炭火力に頼る日本が温暖化に逆行していると世界中から非難を受けていることから、今後、バイオマス発電が脚光を浴びる余地は多いにあり得る。

#### 第5節 竈で炊くご飯の効用

写真右は子供たちに実際に竈を使って炊いたご飯を食べる体験をさせ、薪や炭が燃料としても大事なものと教えるのは被災にあった場合に、食育と同時に防災教育にも役立つ。子供たちにとって薪や炭は普段の生活に馴染みのないモノに違いないが、それらがたかだか数十年前まで、家庭の燃料としてごく普通に使われていたという当時の生活ぶりを教え、多少不便であるが、地震等で被災した時にそれらが燃料として使えるということをも身をもって知らしめることも防災教育に有用である。そして自然災害の多い日本では向こう30年以内に南海トラフ大地震が起きる可能性が70%とも言われているが、いざという時に対処するために、子供たちに竈でご飯を炊くという実践させることは本番の非常時に役立つと思われる。

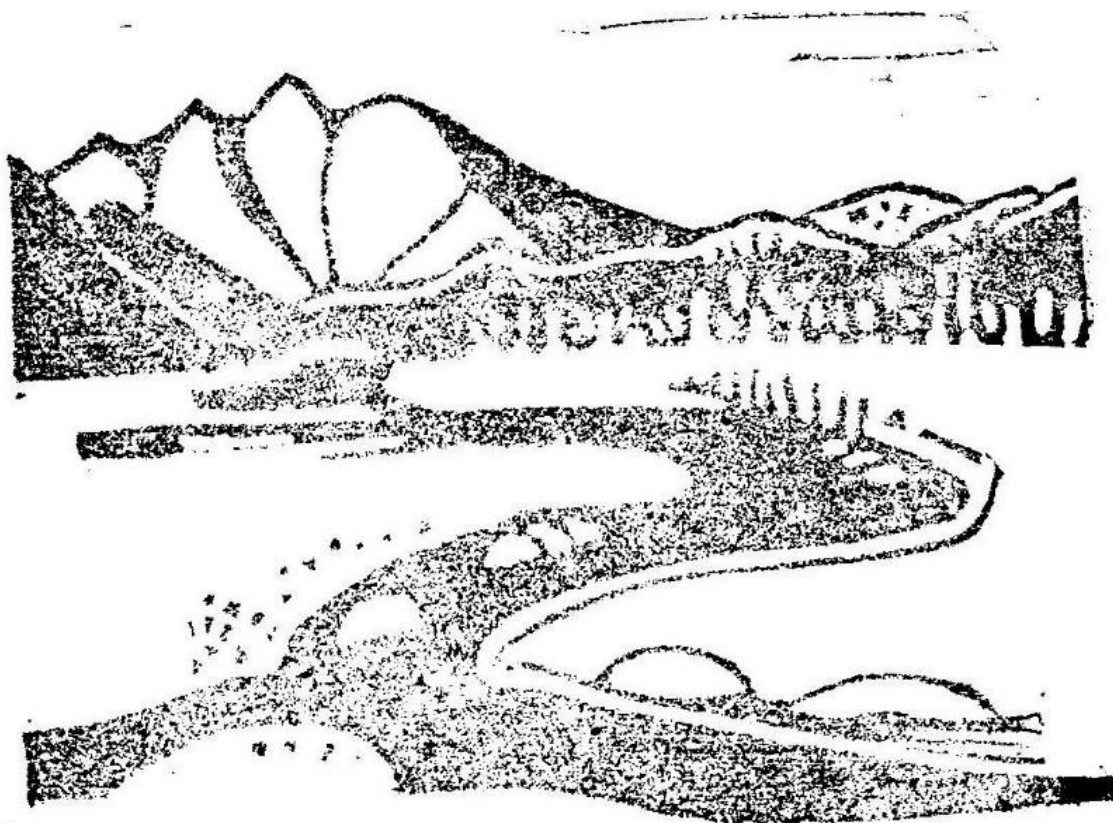
#### 第6節 他地域に見る積極的な木材活用策をヒントに



これまでは薪、炭の活用という視点で里山の振興策を論じてきたが、より積極的に木材そのものの需要拡大に視点を変えて考察する。他地域で既にいろいろな取組がなされている。鳥取県智頭町の山郷地区では、地元名産の智頭杉をふんだんに使った山郷小学校の校舎がある。残念ながらこの小学校は過疎化で廃校となって久しいが、今は別の目的で住民に使われている。

また、宮崎県児湯郡西米良村には、同県の林業活性化に役立てるために「かりこぼうず大橋」という、立派で頑丈な木橋が完成後、多くの車が往来する様子を見ることが出来る。橋の材料に使われた杉は厩大な量であるが、すべて宮崎県産で調達した。

これらの事例が引き金になり、このような取組が全国各地に広まれば林業の活性化に貢献することは言うまでもないことだろう。



## 第6章 獣害問題を考える



### 第1節 神戸市における獣害の現状

神戸市北区のあいな里山公園でシカが繁殖している。シカは栄養状態にもよるが、通常満2歳になるとメスは妊娠すると言われるように、その繁殖力は極めて旺盛であり、放置すると六甲山系へ侵入するのはそう遠い将来ではない。そうならないように食い止めなければならない。イノシシは現時点でも六甲山系、特に東灘、灘でハイカーはじめ住民との接触事故が発生し、人が負傷することがしばしばある。また、北区の道場地区でもシカの出現の報告がある。イノシシは出来るだけ適正な頭数にコントロールする必要がある。

### 第2節 有効な対策は現状では電気柵のみ

写真左はイノシシの蒐場で各所で見られる。写真は私たちが手作りで作成した獣害除けのロボット、モンスターウルフを模したもので「ガオー」と名付けた。前回の模造紙による発表に際してデモンストレーション用にメンバーの女性陣が作ったものである。

専門家によれば、音と光で獣を威圧するロボットのモンスターウルフは設置後しばらくは効果が有るが、やがて偽物と見破られる。そうなると全く効果なしである。イノシシ、シカなどは人間が想像する以上に学習能力が高いのである。

モンスターウルフの価格は定かではないが、かなり高価な代物であると推定される。それが短期間に偽物と見破られては獣害退治には使われることはない。猛獣などの匂いを付ける方策も雨などで匂いは消える。忌避剤も同様に長期間にわたって効くものではない。もちろん毒物での毒殺は原則として法律で禁止されている。

### 第3節 電気柵の問題点と課題

電気柵も設置後のメンテナンスが定期的に必要なだし、第一経費が高くつく。しかし、現実的に効果が期待できる解決策としては、現時点では電気柵以外にはない。それに伴う経費を国や自治体が補助・助成するしかないだろう。問題は補助金、助成金の額が十分ではなく、被害を被っている農林業者に大きな負担となっていることである。一般的に、日本では農業者に対する補助や助成に対して欧米各国に比べてその額は低く、しかも他産業の従事者や国民からは、イメージとして農業者は補助金政策に頼っている、政府は農業者を甘やかし過ぎだとの考えが強いように思われる。

#### 第4節 近年獣害が深刻化した理由

結論は単純で、要は里山での人口減少が継続するのと反比例して、シカ、イノシシ等の獣の数が増え続けていること。即ち、両者のバランスが崩れたというのが地域住民らの見解である。

実際にシカやイノシシは増えている。兵庫県でも二ホンジカの生息数約8万頭(平成29年度末の推定中間値)の内年間約4万頭を駆除するがそれでも一向に減らない。

駆除はしているにもかかわらず減らないのはそれ以上に増えているからである。実際に駆除の実働部隊である猟友会のメンバーは高齢化でシカやイノシシを捕獲する人が減っている。一方で最近では「狩猟女子」と言われるように若い世代の女性が銃を使用してシカ、イノシシを捕獲する動きが少しずつではあるが出てきているのは獣害対策にとっては望ましい動きである。

#### 第5節 ジビエ料理の普及と課題

ところで、捕獲されたシカ、イノシシを有効利用するためにもジビエ料理がもっと普及するといい。食べ慣れないシカ肉でも、子供の頃から学校給食で食べていると次第に抵抗感も少なくなると思う。現に鳥取県の若桜町など学校給食にシカ肉を提供しているところもある。

写真右は実際にメンバーがジビエ料理をシェフの指導を受けて調理し美味しく味わった。捕獲後3時間以内に血抜き、解体を処理する処理場が少ないなど課題が多いことも知った。もったいない話であるが、大半が土中に埋めて処理されているのが現状である。だから解体処理場をもっとあちこちに作る必要がある。

#### 第6節 農林業への国・自治体の補助に対する国民的合意が大事

日本の食糧自給率が他国に比して格段に低い理由は、北海道を除くと経営規模が小さく農業生産性が低いことが理由だが、その背景として国民が農業を非常時には食糧供給を支える基幹産業であるとの意識が皆無とまでは言わないにしても、その意識が極めて希薄なことが要因だろう。その点、陸続きであるヨーロッパは歴史的にそれを経験しているので、国民の農業者への所得保障にも理解が深いのであろう。

2019年12月、最後のSGSの授業で、兵庫県農政環境部参事の西村いつき氏の講義でフランスでの有機栽培の実情視察の話を知ったが、その際フランス、ドイツなどは全農産物に占める有機栽培の比率や耕地面積の比率が日本よりも格段に高いとのことだったが、自国の農業者の所得保障に対する国民的合意が形成されている点が日本と大きく異なる、とのことだった。筆者はその際、日本では農業従事者に対して専業農家とか、兼業農家の区分が有るがフランスではどうなのか？ 西村氏の回答はおそらくないだろうとのことだった。彼女のフランス滞在が4日間だったこともあり、限られた日程での限られた場所の視察ということで、その範囲内での回答ということである。

そもそも兼業などせずとも農業が生業（なりわい）として成り立つ産業であれば、兼業などあり得ないわけであるから、日本農業の実情は世界的に見ればかなり特殊な状況だとみるのが正当な解釈なのかもしれない。

## 第7節 獣害問題に潜む看過できない問題点

次ページに示す統計でも農林水産省のそれも同様だが、獣害としてカウントされるのはあくまでも被害を受けた時点ではそれが農業とか林業として経営されている場所での被害に限定されていることである。

換言すれば、幾ら実質的に被害が発生していても、個々の家庭が家庭菜園として小規模で水稲や野菜や果樹を栽培していても統計上には反映しない。

さらにはこれこそ被害が潜在化するものとして、いわゆる耕作放棄地の問題がある。耕作放棄地となったのには個々の農家の事情があろう。おそらく後継者難が最大の理由であろうが、獣害がそれを大きく助長しているのを見過ごしてはならない。

耕作放棄地となるのは一般的には農地としては使い勝手が悪く、山が迫っていたりして日当たりの悪い場所が第一番にその候補地となろう。常識的に考えても最初から条件の良い農地が耕作放棄地になる訳がない。ただ、最近では平野部の真中でも耕作放棄地は増えてきているのは、農業後継者不在の農家が増しているからだと思われる。

その条件の悪い土地が真っ先に耕作放棄地になる訳だが、本来なら田んぼ、畑、または果樹園として利用されていたのに、それが収穫直前にシカをはじめイノシシやサルなどに食害されれば、農業者にとって非常に精神的痛手は大きい。後継者がいなければ高い経費を出してまで対策として電気柵等を設置しようという意欲はわからない。結局、そこは獣害によって、最終的には農業生産をやめる結論に至る。

そして農業統計上は耕作放棄地として位置づけられる。だが条件さえ満たされれば、まだまだ農地として利用できることに変わりはなく、農産物を生産できたはずである。即ち、これが「逸失利益」としてカウントされれば事実上、獣害被害はもっと多くなる。その点を考慮すると獣害を極力減らすことがこれからの農林業従事者にとっては喫緊の課題である。



## 兵庫県のニホンジカ被害

出典：第2期のニホンジカ管理計画、平成29年度事業実施計画資料編  
平成29年3月兵庫県

生息数 約12万5千頭（推定中間値）  
農林被害 2億円以上  
生態系被 下層植生衰退 鳥類の出現低下 ウグイスの営巣場所消滅  
蝶類の減少  
ウスイロヒョウモントカゲモドキの絶滅  
特定不嗜好性種の繁殖 イワヒメワラビ  
土壌侵食・崩壊

被害対策（シカの数減らす）年間4万5千頭以上捕獲（多くが現場で埋設処分）

問題点 有効活用されていない。 正規の処理で食用にされているのは2千頭程度。

兵庫の野生鳥獣害対策シリーズ2018① 兵庫県森林動物研究センターのチラシ抜粋

### ニホンジカの被害防止 「仕方がない」から「確かな防除」へ

#### 生態と分布

何でも食べる厄介者：草食性の動物で殆どの植物の葉や樹皮、根や果実も食べる。環境によって食べるものを変えることが出来る

夜に活動：食べては休みを繰り返すが人間が活動しない夜に人里に出てくる。

高いジャンプ力：身の危険を感じた時は、2m以上のジャンプ力があり、急峻な斜面も一気に登る

エサが豊富なら毎年出産：交尾期は9月中旬～11月上旬、出産は5～6月、1頭を出産する。1歳秋には性成熟するが、1歳での妊娠率はエサ条件により20～70%程度まで大きく変化する。なお、2歳以上の成獣の妊娠率は80～90%以上と極めて高くなる。

#### 被害状況

中山間地域で、水稻、野菜、豆類、イモ類、雑穀、果樹など多くの農産物の被害がある。被害の大きい水稻では、田植え後から稲刈りまで全ての段階で水田に侵入し、踏み荒らしたり、葉や穂を食害する。シカは縄張りをつくらないため、農耕地や草地では、比較的大きな群れになる。同じ田畑に繰り返し侵入し、被害が甚大になる。

## シカを集落に寄せつけないために

### 防護柵の種類と使い分け

#### 「個別柵」と「集落防護柵」

個別柵は、設置や見回り、点検修理は比較的簡単だが、それぞれの農地を囲うので経費がかさむ、集落防護柵は、うまく設置すると大きな効果を発揮するが、地形によっては貼り方に工夫がいる。見回りや点検修理に労力がかかる。

金網柵：耐久性が高い。設置経費が高い。見守りや点検修理に労力がかかる。

ポイントは高さは2m以上

ネット柵：設置経費が安い、設置しやすい。耐久性が低い。噛み破りにより侵入されやすい。ポイントは高さは2m以上。

電気柵：設置経費が比較的安い。設置しやすい。こまめな電圧チェックや漏電防止の草刈が必要。電気を通しにくいアスファルト道などの近くには張れない。

ポイントは高さは1.5m以上、4段張り以上。

## 無意識の餌付けをなくす

野菜くずの放棄：田畑に野菜くずを捨てない。

ひこばえの処理：稲刈り後に生えてくるひこばえを放置せず、耕起してひこばえの発生を防ぐ。

## 集落みんなで対策を

### 集落防護柵のメンテナンス

### 餌場として魅力のない集落づくり

## 有効活用について

ジビエ料理の他、セーム皮や印伝などの皮革製品として日常的に活用する





## 第7章 かいぼりに参加し、生物多様性を考える

ため池のかいぼり 厄介なアメリカザリガニ 外来種アカミミガメの捕獲に効果



### 第1節 かいぼりの目的と効用

主な参加者は小学生やその保護者である。後日、私たちも別の池でかいぼりに参加した。ため池を初めて見るという小学生もいた。

かいぼりは池の水を干して堤のひび割れを点検し、補修するのが本来の目的であるが、最近ではテレビで池の水を全部干して外来種の駆除をする番組が注目浴びている。その影響もあり、かいぼりは外来種駆除のためだと思っている人が結構多いようだ。

その実施には地域住民の協力が欠かせないので農村のきずなを深めるのにも役立っていた。また、副産物として、そこで獲れたコイやフナなどが住民の貴重なたんぱく源にもなっていた。

### 第2節 かいぼりをめぐる近年の状況

しかし、近頃では食生活の欧風化でこれ等の魚を食べる人も少なくなり、外来種の駆除が主な目的となっているのは食文化の継承にとっても非常に残念なことである。アカミミガメ、ザリガニなどの駆除には有効であるが、根絶やしは不可能である。泥の中に逃げ込むからである。なお、池の底に堆積したヘドロは田畑の肥料として利用されてきた。他にも捕獲した外来種の有効利用も考えるべきである。外来種＝悪ものというイメージが強いが、彼らも命ある生物に変わりはないのである。元はと言えば持ち込んだ人間が悪いということを忘れてはならない。

### 第3節 文化の違いと価値観・常識に捉われない発想が大事

さて、意外と知られていないが、アメリカ人や中国人はザリガニを食べる。文化の違いもあり、日本ではザリガニを食べる習慣はないが、食べてやると供養になるかもしれない。ところで、イカナゴの不漁が年々深刻化しているが、原因は川や池から海に流れ込む栄養分がダムや堰堤などで海に十分な栄養分が流れ込まなくなり貧栄養になったからだと言われている。また、下水処理場で処理される濾過技術の向上で処理場からの排水が浄化され過ぎることも原因と言われる。「過ぎたるは及ばざるが如し」で、人為的なコントロールが強すぎてもダメである。他方、乱獲も原因の一つかもしれない。

## 第8章 竹林や放置林の伐採・間伐に挑戦

竹の伐採作業      ボイラー燃料は竹チップ      竹パウダーの製造工場      竹製品の一例



### 第1節 あいな里山公園での竹林や里山林の伐採に従事

現在、手入れがなされていない放置林や竹林は全国各地にある。写真左端はあいな里山公園の里山林である。ここには多くの広葉樹や竹林が存在する。

ご存知のように阪神淡路大震災の記念イベント 1.17 で使用される孟宗竹の竹灯明台は、ここでは概ね2割を供給しているが、竹の伐採に従事するボランティアが高齢化したこと及び成育場所が急斜面での伐採作業で供給量を確保するのがやっとなのである。

最近竹の代わりにペットボトルの活用が取り沙汰されているが、マイクロプラスチックが海のいきものの生存を脅かしている現状を踏まえるとその使用は控えるべきだというのが妥当である。竹の有効利用で放置竹林を少しでも減らせるからである。

### 第2節 里山の持つ国土保全機能の重要性

地球温暖化と相まって、毎年、日本のどこかで大規模な自然災害が発生しているが、それは人災でもある。里山の持つ自然の保全機能を最大限生かすと減災も可能である。たとえば林床の下草がシカに食われて表土が露わになり土砂崩れが助長される。兵庫県でも筆者が武庫流会の魚道見学と里山探訪に訪れた豊岡市の田結（たい）地区は、山の斜面が殆ど裸地の現実を目にして驚愕と同時に緊急事態の際を想定して危惧した。

### 第3節 国土保全機能の正当な評価と補助・助成への理解

第5章、第3節でも触れ、内容が重複するが里山の多面的機能を重視する意味で再度獣害防止の電気柵設置にかかる費用負担を考える。国土保全機能の面から国や自治体の補助制度を拡充することで農林業者の負担を軽減し、土砂崩れが防止できれば大局的には国や・自治体の財政支出も抑制できる。そうすれば農林業従事者が就労意欲を持続でき、耕作放棄地も減らすことが出来る。また、田んぼや棚田、池などの持つ遊水地としての機能を同様に国や自治体が正当に評価して、それらの補修に必要な経費を助成する制度をもっと拡充すべきである。下段写真は左から、竹チップを燃料とするボイラー、真ん中は竹パウダーの製造工場である。ボイラーは淡路市、竹チップは南あわじ市でそ

それぞれ現地に赴いて処理する行程を見学した際のものである。右図は竹製品の一例である。

#### 第4節 自然素材としての竹の皮の見直し

また、半世紀ほど間には精肉店では商品の肉を自然素材の竹の皮で包むのが普通のことだった。竹の皮には殺菌作用があり、肉が腐敗し難い作用がある。その名残か、現在、石油化学製品で作られた包装材にも竹の皮に似せたデザインが使われていることが多いのも興味深いことである。だが現代の包装材は分解されずに地球上にゴミとして蓄積されることが大きな社会問題となっている。竹の皮の利用が多くなると、その分だけ確実に石油化学製品の包装材の利用が減り、解決策の一助にもなる。

他方、昔のように竹の皮を利用すれば、必然的に竹林に入る機会が増え、それに付随して竹林の整備が進むきっかけになる。近年、脚光を浴びている徳島県上勝町の「葉っぱビジネス」のように、高齢者に新たな生きがいをもたらすこともできるかもしれない。

#### 第5節 時代の変化に伴い里山が荒れる意味も変わる

第1節で述べたように手入れがなされていない里山林が多いが、実は里山が荒れるという当初の意味は、田中角栄首相当時の「日本列島改造論」などによって、里山林にブルドーザーなどを使った重機が入り込んで、次々とそれらが伐採され、宅地造成されたり、ゴルフ場用地のために利用されたことに端を発する。

何とならば里山は比較的都心部から近く、それでいて地価は安価のため格好の開発用地として利用された。それが当初の里山が荒れると言う意味だった。しかし、最近、というかここ10数年来の里山が荒れるとは、もはやそれらの現象を意味することはあまりなく、専ら少子高齢化による理由で里山に人の手が入らなくなったことを指すようになった。常識は不変ではない。時代と共に変化するというのを改めて知った。

だから、里山を活性化する処方箋は突き詰めれば、里山に賑いを取り戻すと言うのが単純明快なことである。しかし、実はこれが相当に難しいのである。神戸市のような大都市でさえ人口減少が生じている。まして中山間地の過疎の自治体では事態はもっと深い。その対策については最終章で考察する。



## 第9章 ホタルが乱舞する環境づくり

ホタルの人工飼育施設を前に  
山手大学吉岡先生の講義を聴く



水路でカワニナの生息調査をするも  
見つからず



### 第1節 ホタルの乱舞は見る事ができず

私たちはホタルの人工飼育に取り組んでおられる山手大学の吉岡英二先生の研究室を訪れ、エサの確保や水槽の水替えなど苦労話をお聞きした結果、私たちが人工飼育をするのは経費面でも技術面でも無理だと実感し、人工飼育はあきらめ、ホタルが生育しやすい環境づくりに力を注ごうと決め、地道にカワニナの生息調査を続けることにした。

ところで、今年の夏はあいな里山公園では里山フレンズのいきものグループが主体となってホタルの夕べの活動に案内人として参加した。ヘイケボタルは僅かに見れたものの、ゲンジボタルは殆ど見る事が出来なかった。昨年の台風による水害で木見川の一部ががけ崩れの為、土砂で埋まったこと、濁流で幼虫が下流に押し流されたことが原因ではないかと推定している。

### 第2節 ホタル復活の可能性はあるのか

2019年の夏、千種川支流の佐用川でゲンジボタルが水害から10年振りに復活したニュースに勇気づけられた。ホタルの復活を願って諦めずにカワニナ調査を続けることにする。このことによって、私たちはホタル生息の必要な条件さえクリア出来れば、きっといつの日かホタルの乱舞が見られることを夢見て、決してあきらまないとした。

### 第3節 ホタルの乱舞の効果

ホタルが夏の闇夜に光れば、感動する人が大半ではなかろうか。日々、都会の雑踏で暮らす都市住民が住む環境にはホタルが生息するような小川や用水路はない。それが三宮の都心から車で30分程度のあいな里山公園で見られることが実現すれば子供にせがまれて一度は見に行こうか、という気持ちが沸き起こる、そんな人が現れるだろう。そして、里山のすばらしさを体感してリピーターになる、ホタルは里山に人々に関心を持たせるシンボリックな昆虫である。

発行日付 2019年7月18日

場所 神戸山手大学 吉岡研究室 日時 2019年7月12日  
面談者 神戸山手大学 現代社会学部 吉岡 英二教授  
目的 神戸山手大学におけるホタルの飼育 見学と聞き取り調査

### 1) 大学情報

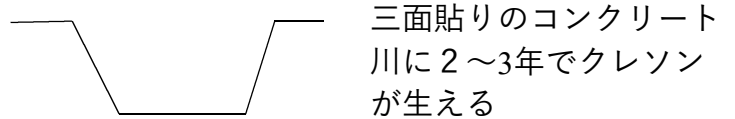
神戸山手大学・神戸山手短期大学（神戸市中央区）のキャンパス内のホタル橋で5月24日から6月3日まで、ホタルを観察することができる。  
同キャンパスを横切って流れる宇治川では、2002（平成14）年からゲンジボタルが出現している。生物学を担当する研究室では、その消長の記録や保護・生態研究を目的とした幼虫の飼育を続けており、学生活動としては「宇治川ホタル研究部」が設立され、河川の清掃活動やホタルの観察会の運営などをおこなっている。



### 2) 吉岡教授とホタル飼育場



宇治川下流はモザイク横の水門が出口



土がたまりジュウタンのようにはがれる  
がクレソンを食べてカワニナは生息する

2002年巡回警備員が始めてホタルを見つけた  
2012年に河川改修

### 3) ゲンジボタルの生活史



気温が上がり、発光し飛翔すると交尾に5・6日  
オスが小さい  
反対方向で交尾  
ヘイケホタルはマウントする  
産卵は6月  
0.5mm~0.7mmの卵を産む  
コケの有るところに  
一匹で500くらい  
200~300程度は確認  
メス50匹で1万粒の卵

室内で飼育すると産卵数がぐっと減る  
1000卵個数で半分生育  
その内半数が羽化



卵から幼虫に  
顕微鏡拡大モニター上

手のなかの藻のなか  
に卵が居る  
これが卵の姿



幼虫はカワニナを食べる  
稚貝は2mm程度 同じ大き  
さのカワニナを食べる

いろいろな大きさの  
カワニナの稚貝  
乾燥した  
牧草を食べる  
カキ殻も生育に良い



ホタルの幼虫は消化液で溶かしながら食べる  
肉食性だが共食いはしない



幼虫が3月～4月に上陸  
前蛹（サナギ）  
終令幼虫  
サナギで光る

大きいカワニナを殻ごとつぶし  
ホタルの幼虫に与えている  
一つの水槽に1万匹がいる

ホタルの飼育は極めて困難  
終令幼虫で¥300で売っている  
現在カワニナ以外のえさで飼育を研究している

## 第10章 里山をもっと知るために ～まずは身近な里山から～

可憐なササユリ

採って嬉しい収穫体験



### 第1節 あいな里山フレンズとしての活動

私たちはこれまでのフィールドワークを通じて里山林が放置され、薄暗くて人が寄り付かない竹林等、里山が抱える問題点や課題を身を以って知ることができた。しかし、見学や講義を聞くだけでは問題点や課題に対して何の解決も出来ない。微力な私たちが里山を改善するには、実地に活動する必要があると思う。まずは身近な山の実態把握からはじめることにし、選んだのがあいな里山公園である。

あいな里山公園では各自の興味・関心のある分野別に「あいな里山フレンズ」という5つのグループからなるボランティア団体がある。いきものグループ、食グループ、クラフトグループ、畑グループ、ガイドグループである。

「いきものグループ」は園内に生息する動植物を調査し、生態系も学習する。「畑グループ」では無農薬、化学肥料を使わない野菜作りに励んでいる。「クラフトグループ」は主に園内で伐採した竹を活用したモノづくりに励む。「ガイドグループ」は施設の説明だけでなく、その時期ならではの見ごろの動植物のこともいきものグループと連携して案内している。「食グループ」は園内の野菜、山菜等を食材にして里山の食文化を来園者に伝える。なお、筆者の属するいきものグループで観察した動植物の種のリストづくりをリーダーが主体となって作成し始めた。

### 第2節 都市住民とあいな里山の絆を深めよう

以上5つのグループが互いに協力しあって、互いのスキルアップを図っている。都市住民が気軽にあいな里山公園に来園し、里山の雰囲気存分に満喫できるよう、私たちが橋渡しの担い手になろうと思う。その一つの方策として収穫体験のイベントがある。対象が小学生の場合、そのうちの一人でも大人になってその時の体験を後年になって思い出し、自分たちの子供と一緒に再来園してくれれば喜ばしいことである。



## 第11章 今後の展望と提言

### 第1節 里山は生物多様性の宝庫

私たちはこれまで様々なフィールドワークを行ってきた。海と川との密接な関係を改めて知った。里山は希少な動植物の宝庫で生物多様性が豊かで人々の生活に潤いや郷愁を与える。あいな里山フレンズいきものグループでの活動記録を別紙に掲げる。都会ではまず見られないあいな里山公園の田んぼにはタイコウチやニホンアカガエル、カスミサンショウウオなどが生息する。農薬を使わないと多様ないきものが生息できることが実証された訳である。

### 第2節 里山の持つ多面性

また、里山問題を考えるうちに里山の持つ多面性にも気づかされた。それは他グループの発表内容との関係で、総べて里山に関わりを持つ。それを順次考察する。

まずは有機農業を推奨する「アグリくん」である。それを実践する農地として里山の畑を見逃す手はない。それどころか再三述べてきたように、獣害の深刻化や耕作放棄地が年々増加する現実があるのだから。次に「アトム&ウラン」が提唱する脱原発、反原発の推進との関わりである。ローカルエネルギーとしてのバイオマス発電である。人口の少ない里山を擁する多くの中山間地では大量の電力需要はない。そこではバイオマス発電による供給で充分だとする地域も多いと思う。最後に、「ラメール」の提唱するマイクロプラスチックによる海洋汚染との関わりであるが、同グループが指摘するようにマイクロプラスチックの発生源の多くが川や池から海に流れ込んでいることだ。その汚染源を絶つのは容易ではないが里山が豊富に有する木材を原料とするバイオマスプラスチックが強力な解決策となり得ることである。当面はコストの問題などいろいろ課題があるのは確かだが、有力な解決手段になり得る。キーワードは地産地消である。

### 第3節 都市住民と里山住民との交流推進及び里山への資金還流体制作り

#### (1) NPO 法人「里地里山問題研究所」獣害対策、特にサル対策で有名

都市住民と里山に住む農林業従事者との交流を深め里山に資金が流れるシステム作りが欠かせない。丹波篠山市にはサル対策で実績がある NPO 法人「里地里山問題研究所(通称: さともん)」が活動している。筆者は「さともん」が篠山市(現、丹波篠山市)で主催した第1回獣害シンポジウムに参加した。私たちは「さともん」が手掛ける黒豆オーナー制度のオーナーになったり、農産物購入などで支援し里山活性に協力したり、里山を擁する中山間地へ「ふるさと納税」するのも支援になる。

#### (2) 「農都共生ネットこうべ」の取組: 種粃の温湯消毒及び種蒔きと水田魚道の設置



次に筆者が所属する任意団体、農都共生ネットこうべは神戸市西区平野町上津橋の上津橋土地改良区及びコープ自然派兵庫3者が運営し、他に協力団体として兵庫県神戸土地改良センター、横尾自然塾が加わりマイ田んぼや共同区画の参加者をそれぞれのグループの中から募り、無農薬でコメ作りをしている。その活動は10年以上に及ぶ。中でもユニークな取組は苗代を自分たちが前年に作った自家採取した種籾の温湯消毒(60℃に10分間浸けた後、冷水に入れる)での苗づくりを2015年度から始めた。また、2016年度から水田と用水路の段差に水田魚道を設置した。2017年度には魚類・ビオトープでドジョウの遡上が確認できた。2018年度には魚道・ビオトープでドジョウの稚魚が確認できた。冬季には上津橋大池でコウノトリの飛来が新聞に掲載された。水田魚道の詳細は同団体所属の「土井敏夫(2018)兵庫陸水生物、No.69:13-18より抜粋」を参照されたい。

コメ作りの参加者は小学生の家族連れも多いので、子供たちが田んぼに来ると玉網を持っていきもの探しに熱中する姿が見られるのも嬉しい。

### (3) 奈良県明日香村と大手マンション建設会社の連携による新たな「二拠点生活」提唱

都市生活者がいきなり里山地域へ移住するのはハードルが高い、さりとて観光だけでは物足りない。そんな思いの都市生活者のニーズを発掘したのが両者の提唱する「二拠点生活」だ。即ち、マンション住まいの都市生活者は普段の生活をコンクリート建築物のビル群に取り囲まれて生活している。そんな彼らに週末は「自然豊かな田舎暮らし」の誘いに魅力を感じる都市生活者は少なくない。

具体的には明日香村にある畑を借りて野菜を作る「貸農園」を借りるのだが、比較的廉価(25㎡が3000円/月)で借りられる。しかも野菜の苗や肥料、農具はすべて地元で用意してくれる。また、全く農作業に対する知識、技術等経験のない者でも村人がサポートしてくれるサービスを受けられる。都市生活者は帰宅するに際し、道の駅などで野菜その他土産物等を購入する機会も増える。

宿泊施設は村で空き家となった古民家を再生し、そこに住んでもらうという仕組みだ。明日香村と長谷工コーポレーションが地域連携協定を結び、その事業を展開している。村にとっては空き家対策にもなるし歴史的風土が保全される。また、企業側はマンション販売に際して付加価値が得られるという、ウインウインの関係である。

この動きが地域経済を活性化する。また、貸農園の借主が定年後はマンションを引き払い移住することも十分可能性がある。里山に賑いを取り戻す格好の処方箋の一つとして今後の動向を注目したい。これがうまく機能すれば都市から里山への資金還流となる。この動きが全国各地に広まることを期待する。

以上、里山の活性化策は諸々ある。私たちはあいな里山公園を拠点に、里山フレンズの活動をフル活用して、里山を盛り上げる機運を高める。また、里山に対する知識や技術を高めるべく日々研鑽、努力する所存である。より多くの人々があいな里山公園に来園することを願う。そこでは、都会では得られない素晴らしい里山ライフが愉しめる。それらを端緒に私たちに見合った取るべき方策がきっと見つかると思える。

## 里山フレンズ グループ活動記録

グループ ○で囲む	<del>畑</del> <del>かかし(ガイド)</del> <del>いきもの</del> <del>クラフト</del> <del>食</del>
記録者	平林 内田
活動日時	令和 元年 6月 12日(水) 10時~ 12時 天候:(くもり)
活動参加者 (8+1名)	生田、石原、内田、置塩、加藤、倉持、玉井、平林、西川(食)
活動内容 活動写真 など	<p>① 16日の初夏の里山ガイドに向けての打ち合わせ 参加者は長屋門 10:00 集合 チラシ「あいな里山公園、6、7月の見ごろの花・生きもの」を参考に紹介する生物を絞る。専門的な説明は求められな いかぎり避け、分かりやすく。</p> <p>② 下見を兼ねて、当日予定のコースを散策。 <u>観察種は別添のとおり。</u></p> <p>(備考)</p> <p>① コース上のミヤコグサは花序の花数が1~3などの理由で、3~7のセイヨウミヤコグサでなく在来種の「ミヤコグサ」。</p> <p>② 黒っぽいやや小型のトンボは、ハラビロトンボのオスでした。羽化直後はシオカラトンボのメスのように黄色で、成熟するにつれてシオカラのオスのように青くなり、さらに黒っぽい藍色になるそうです。</p> <p>③ クリの木付近の地表で見られた虫はエンマムシ科の甲虫で、手持ちの資料を観る限りヤマトエンマムシのようです。腐肉などに発生するウジ等を捕らえて食べるそうです。写真では粒々が付いていますが、卵ではありません。虫につくダニです(さすがの平林も苦手)。</p>



(別添) 2019年06月12日観察種

あいな里山フレンズ 生き物グループ

草本植物

キク科：ヤブタビラコ・ノゲシ・オニノゲシ・ヨモギ・コウゾリナ・キツネアザミ

オオバコ科：ヘラオオバコ

シソ科：ウツボグサ

バラ科：ワレモコウ・ヘビイチゴ

アヤメ科：ニワゼキショウ

アブラナ科：マメグンバイナズナ

イグサ科：スズメノヤリ

セリ科：ハナウド・ヤブジラミ

ガガイモ科：スズサイコ

カヤツリグサ科：カヤツリグサ

ドクダミ科：ドクダミ

イネ科：カモジグサ・チヂミザサ

カタバミ科：カタバミ

フウロソウ科：ゲンノショウコ

ユリ科：ササユリ

アカネ科：ヘクソカズラ

サクラソウ科：オカトラノオ

木本植物

ムクロジカ科(旧カエデ科)：イコハカエデ・ウリカエデ

ニレ科：エノキ

クルミ科：ノグルミ

カバノキ科：ハンノキ

ブナ科：クリ

昆虫

甲虫目：マメコガネ・コアオハナムグリ・ヒメアシナガコガネ・ゴマダラオトシブミ

・ヤマトエンマムシ・ナナホシテントウ(蛹も)・カミキリモドキsp.・ヨモギハムシ(幼虫)

チョウ目(鱗翅目)：ツバメシジミ・モンキチョウ・ヒメアカタテハ

・マイマイガ(幼虫)・カシワマイマイ(幼虫)・タケカレハ(幼虫)

トンボ目(蜻蛉目)：シオカラトンボ♂♀・ハラビロトンボ♂

カメムシ目(半翅目)：ホソヘリカメムシ・アワフキムシsp.(泡の巣)

ハエ目(双翅目)：アシナガバエsp.・ガガンボsp.

鳥類

鳴き声のみ：ウグイス・ホトトギス

両生類

ニホンアカガエル・ツチガエル(右)

哺乳類

タヌキのものと思われる獣糞(植物の繊維・甲虫の翅・脚含む)



アカバナユウゲシヨウ



コウゾリナ・ハナアブsp.



アシナガバエsp.



ヒメアカタテハ



左：ハナウド

右：スズサイコ(つぼみ)



## 神戸市内の水田に設置された水田魚道によるドジョウの遡上と繁殖事例

土井敏男 農都共生ネットこうべ

### Reproduction of loach in the rice paddy with upstream-migrating in the fishway in Kobe city, Hyogo prefecture

Toshio DOI

ドジョウやメダカなど魚類の中には、水田などの一時的な水域を、産卵や仔稚魚の育成場として利用する種がある（斉藤ほか, 1988）。しかし、近年ほとんどの水田は排水性能の向上のため、水田と排水路に落差を付けており（楠田, 2008）、両者が分断されることで、ドジョウやメダカが水田を利用できずに減少している（兵庫県農政環境部環境創造局自然環境課, 2017; 三塚ほか, 2006）。これらの魚類の復活のため、水田魚道の設置が各地で行われ、効果を得ている（楠田・笠原, 2009; 三塚ほか, 2006; 田中ほか, 2007）。都市近郊の水田における環境配慮型農業の取組みとして、神戸市内では、4例中の1例目となる水田魚道が設置された。その結果、神戸市レッドリストCランクのドジョウ（神戸市, 2015）が水田へ遡上、繁殖したので報告する。

#### 方法

**魚道設置経緯**—神戸市西区平野町の上津橋地区では、兵庫県（神戸土地改良センター）が2005年よりほ場整備を行い、生態系に配慮した排水路が整備された（植杉, 2010）。これを契機に同地区では2009年より、都市住民が稲作体験を通じて地元と交流を図り、水田の環境や生物多様性を実感する場として、水田一筆を「田んぼの楽校」として開校した。そして、この活動の高まりの中で「水田魚道」の整備が望まれるようになった。2016年、全国で水田魚道の普及活動をしている（一社）地域環境資源センターから依頼があり、上津橋土地改良区との共催で「水田魚道設置指導者全国研修会」を開催した。この研修の中で、同センターが資材や技術を提供し、魚道を設置した。なお、当研修会は、兵庫県、兵庫県土地改良事業団体連合会、田んぼの楽校運営委員会、農都共生ネットこうべ、生活協同組合コープ自然派兵庫が後援した。

**水路と水田**—上津橋地区の水路は、3面張りであるが、環境配慮型として、水深に変化を付け、生物の脱出用斜路、魚巢、ワンドが作られ、水路が交差する部分には水深がある会所が設けられている（植杉, 2010）。田んぼの楽校の水田に面した水路は、3面張りの直線部で、水深に変化が付けられていた（図1A）。水路には明石川から導入された水が常時流れている状況である。田んぼの楽校の水田は、水路から約1.5mの高さにあり、水田への給排水は配管によった。水田での年間作業は、5月に粃蒔き、6月に水張り、代掻き、田植え、7月上旬に草抜き、7月下旬～8月に中干し（2018年は実施せず）、9月に水抜き、10月に稲刈りを行っている。なお、稲作は無農薬、有機肥料のみで実施している。

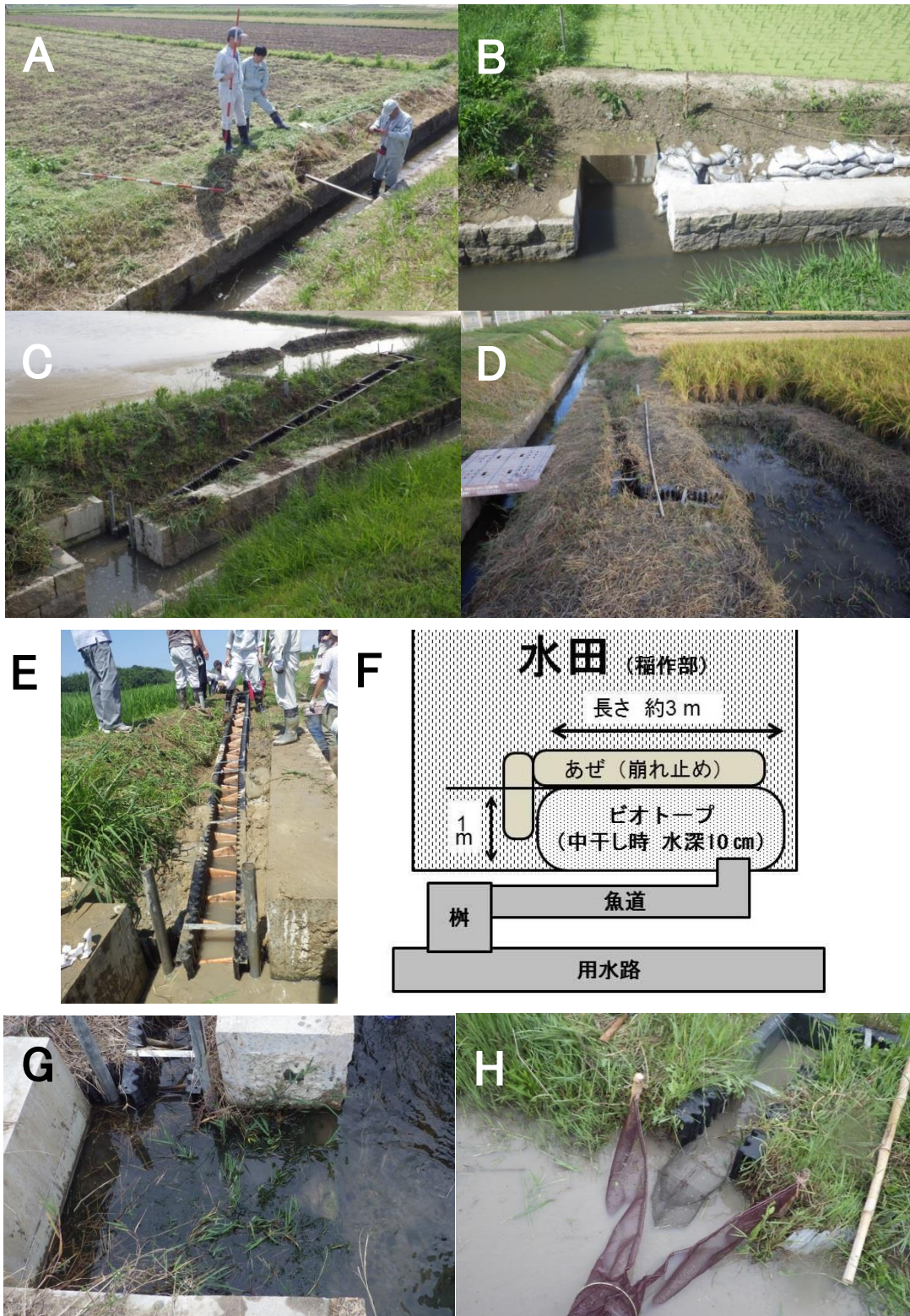


図1. 神戸市西区上津橋地区 田んぼの楽校に設置した水田魚道

A: 魚道設置前の水田と水路、B: 水路に掘り込んだ塹、C: 塹から水田への魚道設置後、D: 魚道出入り口のピオトープ (掘り下げ) E: 魚道内の千鳥堰、F: 魚道の平面図、G: 塹の拡大写真、H: 水張り時の遡上生物捕獲用仕掛け

**魚道の設置**—魚道は、水路の護岸に約 1 m 各の柵 (図 1B、2016 年 6 月) を設け、柵から斜め畔を掘り、樹脂製波付 U 字溝を置き、L 型ジョイントで水田に繋いだ (図 1C、2016 年 7 月)。U 字溝には千鳥型の堰板を設置した (図 1E)。水田には、水抜き時に魚類が避難できるビオトープとして、魚道入口周辺を掘り下げた (図 1D、F、2017 年 5 月)。魚道への通水は、2017、2018 年の各年 6 月の水張り時に行った。

**生物調査**—2014～2018 年の 5～11 月の間に各年 3～7 回、田んぼの楽校の水田前水路 (毎回)、水田 (湛水時)、周辺水路 (5～7 月、水田上流の会所・ワンドとその周辺)、魚道設置後は魚道用の柵内 (図 1G) において、タモ網で生物を採集した。また、田んぼの楽校参加者らが採集、目撃した情報を加え、場所ごとの生物種と出現率 (その種の確認回数/調査回数) をまとめた。また、2017、2018 年の 6 月には、水田への水張り時に、魚道から水田への入口部に仕掛け (金網製のもんどりと、袖網付きの袋網) を設置し (図 1H)、水田に遡上してくる生物を捕獲した。ドジョウについては遡上が確認されたため、水田での捕獲個体はスケールとともにデジタルカメラで撮影し、画像から体長 (BL) を記録した。

## 結果

田んぼの楽校の周辺水路には多様な種が見られたが、ほぼ毎回見られる生物は、コイ、メダカ、ヌマガエル、ミシシippアカミミガメ、ヌマエビの一種、アメリカザリガニなどで (表 1)、主に水が淀み水草や転石があるワンドや会所に多かった。田んぼの楽校前の水路は、流水環境で、魚類は少なく、通常見られる種はヌマガエル、アメリカザリガニ、ヌマエビ類であった (表 1)。魚道用の柵設置後は、柵内に水草が繁茂し (図 1G)、ドジョウ、メダカが捕獲された (表 1)。

水田では、魚道設置前には、魚類は全く見られず、ヌマガエル、ホウネンエビなど水田性の生物種のみであった (表 1)。魚道設置後は、水田性の生物に加え、魚道入口の仕掛け、および水田内ビオトープにて、ドジョウ、ヌマエビの一種、アメリカザリガニが捕獲された (表 1)。また魚道設置後の水田ビオトープ内で、メダカ、ライギョ (種不明)、ウシガエルが (表 1)、各 1 個体のみ捕獲された。

魚道を設置する前後のドジョウの捕獲状況は (表 2)、魚道設置前は、2014 年に田んぼの楽校前水路で成魚 1 個体のみであったが、水路に柵を作った後、柵内で 2016 年 7 月に成魚 2 個体、2017 年 5 月に成魚 2 個体が捕獲された。また水田内部においては、水張り開始直後の 2017 年 6 月には水田内ビオトープと遡上仕掛けで成魚各 2 個体 (6.5～10.5 cm BL)、同じく 2018 年 6 月にも仕掛けで成魚 2 個体 (6.4～10.7 cm BL) が捕獲された (図 2A)。水田の稲作区画では、ドジョウは確認されなかったが、ビオトープでは、2017 年 10 月に 1 個体 (BL 未計測)、2018 年 10 月には稚魚 16 個体 (2.8～4.3 cm BL) が捕獲された (図 2B)。また、2018 年 10 月には、柵内で稚魚 2 個体が、水路内で稚魚と成魚 8 個体が採集された。

表 1. 上津橋地区 田んぼの楽校（水田）および水路で見られた水生生物

調査場所 (n = 調査回数)		水生生物種と出現率(昆虫類を除く)		
		50%以上	49~20%	20%未満
水路	周辺水路 (会所等含む) n = 7	コイ・メダカ・ヌマガエル ル・ミシシッピアカミミガ メ・ヌマエビの一種・ア メリカザリガニ	オイカワ・スジエビ	ドジョウ・タモロコ・ギン ブナ・タイリクバラタナ ゴ・ウシガエル・クサガ メ・テナガエビ
	田んぼの楽校 前水路 n = 24	ヌマガエル・ヌマエビの 一種・アメリカザリガニ	コイ・メダカ・ミシシッ ピアカミミガメ・スジエビ	オイカワ・ドジョウ・ギン ブナ・ドンコ・ウシガエ ル・クサガメ・スッポン
	魚道柵 n = 10	ヌマガエル・ヌマエビの 一種・アメリカザリガニ	ドジョウ・メダカ	スッポンの1種
水田	魚道設置前 n = 13	ヌマガエル	ホウネンエビ	ニホンアマガエル・クサ ガメ・カイエビ
	魚道設置後 n = 12	ヌマガエル ヌマエビの一種	ドジョウ アメリカザリガニ・ホ ウネンエビ	メダカ・ライギョ(種不 明)・ニホンアマガエ ル・ウシガエル・カイエ

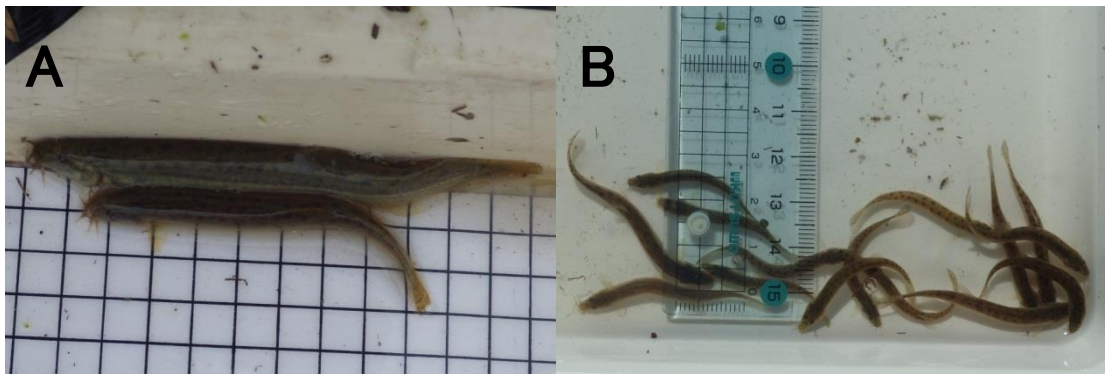


図 2. 田んぼの楽校で確認されたドジョウ

A : 魚道を遡上し、仕掛けで捕獲されたドジョウ成魚 (2017.6.11)、B : 水田内の  
ビオトープで捕獲された稚魚 (2018.10.6)

表 2. 上津橋地区の田んぼの楽校（水田）および水路の魚道設置状況と確認されたドジョウ  
の数

	年 月	2014		2015		2016		2017				2018			
		5~7	7	5~7	5	6	7	10	5	6	7	10	11	6	7
水田	耕作区画	0	0	-	0	0	-	-	0	0	-	-	0	0	-
	ビオトープ	-	-	-	-	-	-	-	2	0	1	0	0	1	16
	魚道(仕掛け)	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	2	-	-
水路	柵	-	-	-	-	2	0	2	0	0	0	2	0	0	2
	水路	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	8
備考						柵 設置									水 田 湛 水

## ㈱長谷工コーポレーションと官民連携に関する包括協定書を締結

奈良県高市郡明日香村(以下「明日香村」と言う)、長谷工コーポレーション及一般財団法人明日香村地域振興公社は、それぞれが有する資源や特性を活かし、飛鳥の歴史的風土の保全や産業及び地域の活性を図るためのプロジェクトを相互に連携協力し、推進することを目的に、2017年9月26日に官民連携包括協定を締結した。包括協定に基づく主な事業は、下記の3つの基本プロジェクトで構成される。

### (1)「明日香村を堪能する」プロジェクト

明日香を知り、明日香を感じ、明日香を味わうプロジェクトとして、また、㈱長谷工コーポレーションが管理するマンション居住者向けのサービス向上として、明日香村の情報発信や農林商工産物の販売を行うことで、販路拡大による地域振興を目指す。

### (2)「明日香村を経験する」プロジェクト

明日香村をもっと深く楽しんでいただくため、長谷工コーポレーション顧客向けの観光サービス、体験メニューの提供を行い、都市住民との交流促進を図る。

### (3)「明日香村に居住する」プロジェクト

明日香村における短期型の新たな滞在方法を提案するとともに、新たな居住空間を創出することで、将来的な定住につなげていく。

上記の基本プロジェクトは、様々な活動を通して明日香村における都市との交流を活性化し、来てみてよかった、住んでよかった明日香村を具現化するための事業を興し、明日香村の歴史的風土を保全するとともに、企業の※CSR活動を推進するものである。

出典：明日香村 HP 抜粋による

### ※CSR：Corporate Social Responsibility

企業の社会的責任。企業は利益の追求だけでなく、環境保護・人権擁護・地域貢献など社会的責任を果たすべきであるとする経営理念。

出典：広辞苑による



## おわりに

私たちは、次世代を担う子供たちが豊かな自然に育まれて、健やかに育つことを願う。その実現に向けてあいな里山公園をフィールド調査の対象として、里山を活性化して、魅力あふれる里山に少しでも貢献したいと同公園でのイベントや調査に協力した。また、各自里山フレンズとしてそれぞれの分野で里山問題にアプローチして、一人でも多くの市民が里山に興味・関心を持つようになって欲しい、それが里山に対する理解を深め、過疎化に付随する獣害等の諸問題の解決の一助となるというのが私たちの共通認識である。

ただ、誤解を招くのは本意ではないのでお断りしておくが、あいな里山公園は国営公園であり、国が管理運営する公園である。そして厳密に言えば、それはいわば里山を展示するテーマパークである、という一面は否定できない。何とならば、そこには里山を構成する一番大事な要素である、その場所を生活の生業（なりわい）とする人々が実際には住んでいないからである。

しかし、だからと言ってそれが全く無価値なものかと言えばそんなことは決してない。筆者の愛好する溪流釣りに譬えれば、入門希望者がいきなり自然溪流へ行ってもイワナやヤマメが釣れる可能性はかなり低い。ビギナーズラックもないではないが、最近の溪流事情を考えると難しい。まずは管理釣場でポイントの選び方、アプローチの仕方、エサの流し方などを学ぶのが無難だろう。そこでの経験が自然溪流での釣りにも役立つという訳だ。そして最初は管理釣場で満足していた者が、次第に飽き足らずに感じ、自然溪流では是非釣りたいと願う。里山問題も同様。あいな里山公園での里山ファンを増やすのである。

あいな里山公園のファンが、それだけでは飽きたらなくなり、実際に人が住む現実の里山に行って、そこでの生活ぶりなどを知りたいと思う糸口になるのでは、と筆者は考える。

私たちの動植物に対する知識は貧弱だし、個人的に筆者は猫の額のようなマイ田んぼでコメ作りをしているが、農業技術は乏しいし、林業体験など殆どない。まして、危険を伴うチェーンソーを使った竹林等の伐採はやったことがない。だが素人には素人なりの里山問題の取組ができるのだ、という考えが浮かんだのは、前あいな里山公園園長の高畑正氏に依頼してレクチャーをしてもらい、助言、指導を得た。話を聞くと面白そうだし、それなら私たちもできるかもしれない、とにかくやってみよう、そんな気持ちになった。

いよいよ本格的な作業として鬱蒼とした竹林の中にある竹をノコギリと剪定ばさみを使って厳しい作業中、竹を伐採する重労働をいとわず全員が力を合わせて頑張った。作業前は暗くて入り込むのが躊躇された竹林が、伐採後は日光が入り込み随分明るくなり、人が入り込みやすい竹林に代わった。その効果は一目瞭然だった。実に嬉しかった。

他にもあいな里山公園で私たちが行った中で印象強いのはかいぼりだった。重いヘドロを運ぶのは随分きつい作業だったが、これまでため池を見たことがないという子供が嬉々としてかいぼり作業をする光景を目にして、里山でのイベント協力の面白さを教えて頂き貴重な経験を得た。

## 謝辞

里山について浅学な私たちに対して、高畑園長には里山がもつ素晴らしい自然環境やそこの文化、歴史等につき講義のみならず、実践活動を通じていろいろなご教授いただき大変お世話になった。また、保田茂学長、池本廣希副学長には内部発表会での適切な講評を頂いたおかげで、それらの講評を素に、発表内容を見直し、より充実したものにしようとする私たちのモチベーションを一層高め、改訂するのに大いに役立ったことに感謝する次第である。

さらに筆者も属する農都共生ネットこうべの一員である土井敏夫氏には、下記の論文、水田魚道での効果を検証した論文を引用することを快諾していただき、同様にあいな里山公園里山フレンズいきものグループの面々にもその観察結果や種作成リストについての掲載も快諾していただいたことに深謝する次第である。

## 引用論文等

『土井敏夫（2018）兵庫陸水生物、No.69:13-18 より抜粋』

『あいな里山フレンズ いきものグループの活動記録より抜粋』

## 参考文献

『シカ問題を考える』～バランスを崩した自然の行方～高槻成紀 ヤマケイ新書

『いま里山が必要な理由(わけ)』 田中淳夫 洋泉社

『川と国土の危機』～水害と社会～ 高橋 裕 岩波新書

## 参考資料

『二ホンジカの被害防止』 兵庫県森林動物研究センター

『イノシシの被害防止』 兵庫県森林動物研究センター

『兵庫県の二ホンジカ被害』 愛 Deer8（アイデアエイト）  
元資料の兵庫県の分を加工

『奈良県明日香村と長谷工コーポレーションの包括協定』 明日香村 HP による

## 講義・指導

国営明石海峡公園神戸地区・あいな里山公園

園長 高畑 正氏（当時の肩書）

## 「里山守り隊」で学習した感想

(順不同)

山川 瑞子

野草に興味があり「あいな野草クラブ」に入会させて頂き、益々あいな里山が好きになって来ました。

当初は来園者人数は、現在程多くはなかったように記憶しています(平成28年5月28日開園)

学習で感じたこと

SGS15期生の研究テーマ「里山の研究」に入れて頂き、そして「里山フレンズ会」に入会、私はクラフトG・食Gに入会し、イベント等のお手伝いをさせて頂いています。

「かいぼり」・「竹の伐採」は本当に大変な作業でしたが、今思えば良い体験をさせて頂いたと感謝しております。

クラフトGでは、畑Gの畑の一角を借り、リース用に「綿の花」・草木染め用に「藍の花」の種を蒔き、園内の装飾用に「おもちゃかぼちゃ」の苗を植え付け草取り、剪定、夏季の水やり等大変でしたが植物の成長して行く様子を楽しむことが出来嬉しく思いました。そして子供達に自然と生物に触れる場(仮名称:子供菜園)野菜の種蒔及び苗の植え付けをし、野菜の成長を見守りながら収穫の喜びを覚えていく場があれば「あいな里山公園」に子供たちの歓声が聞こえるのではないのでしょうか。

イベントで感じたこと

昨年12月に「餅つき大会」のお手伝いに参加させて頂きました。

最初は、なかなかうまくつく事ができなかった子供達も、3回、5回と重ねる毎に上手につける様になりその時の笑顔が忘れられません。

石井 由起子

今回、「里山守り隊」で、私が自然から離れた生活をしていたと実感しました。里山という言葉には「ほっこりとした気持ちになる所・田舎」と曖昧な感じだけでしたが、「里山」にはいろいろな問題がある事。里山は農林業などを通じて、人間が自然に働きかけてできた場所、それが今は生活スタイル等の変化に伴い里山は利用されなくなり、耕作放棄地が拡大し、自然の生態系が失われ、獣害問題等々いろんな問題が起きているという事実が見えてきました。

「あいな里山公園」には、私の日頃の生活では見えてなかった自然があり、私たちはもちろん、特に若い世代には里山の意義を通じて自然の大切さを感じてほしい場所と思います。私は里山フレンズ(食)を通じて「次世代につなぐ里山をめざす」を目指したいと思います。

内藤 マサヨ

神戸の市街地では、市から配布された季節の花が咲いて、町の景観を作り出しています。

そんな時、いのししが出没する画面がテレビで映し出されています、この画面を見た何人の方が、なぜいのししが街中に出没するようになったのかを考える人がいるだろうか。

私は、里山のグループ学習を通して、里山の現状の厳しさ、その中で一生懸命生きている生き物たちがいること、又里山を何とか残したいと努力されている方々を一部ではあるが知ることが出来ました。これからも次の世代に微力ではありますが里山フレンズの一員として頑張れたらと思います。

藤本 靖子

私が里山について関心を持っていたのは、ずばり里山で育ったからです。

その愛する素晴らしい里山に、現在、山積みになった問題点を仲間と共に調べてみたいと思ったからでした。

KSCで「伊川」について学習していたこともあって、川単独でなく森、川、里、海が循環する自然のメカニズムの内容にも魅力を感じました。

最初はこのグループ学習をたった二人だけで寂しくスタートしたのですが、一人また一人と少しずつメンバーが集い、仲良く活動出来ました。そして最後まで誰一人として抜けることなく終えようとしている事に本当に感謝しています。

ただ、内容的にはあまりにも大きすぎました。しかし、私たちグループの特徴であるフィールドワークは、しんどかったけれどまさしく体当たりのチャレンジには楽しいしありませんでした。

これからも微力な私ですが、自然の中にいる事、生き物と触れ合うことが大好きなので、ほんの少しでも出来る事を探して引き続き里山の活性化をめざして挑戦してみようと思っています。

里山守り隊のメンバー!! これからもよろしく(^^)♪

石原 清

里山の活性化に取り組もうと思ったのは、日本全国の里山が疲弊しているからである。少子高齢化の波がこの地域に一段と厳しく迫っている。それがために、野生動物が跋扈し、農林業に従事する人々は獣害に喘ぎ、終には耕作を諦め、放棄地が年々増加する。そこに居住する人々にとってはもちろんのこと、国益から見ても大いなる損失に違いない。

とは申せ、日本国中が人口減少で過疎化が進んでいる。否、我々が居住するお膝元の日本有数の大都市、神戸市でさえも人口減少に悩んでいる。そんな状況にあってどのようにして里山地域での少子高齢化を食い止めることが出来るのか？ 非常に難題である。

とにかく、これからは里山の活性化を目指す策は、端的に言えばその地に賑いを取り戻す、これが唯一無二の策である。理想は居住する人々を移住によって増やすことだが、それは非常に困難である。となると次善の策として都市住民との交流を活発にするしかない。

微力な我々が、それに対して何が出来るか、それが常に念頭にあった。それを具体化する一つの方策が一人でも多く「里山ファン」を増やすこと。それはあいな里山公園の里山フレンズとなって、ボランティア活動を通じて、都市住民に里山の魅力を発信する、それが我々のグループ学習で得た結論だった。

その結論を具体化すべく SGS 前期コース修了後は、できるだけ足繁くあいな里山公園に通って活動するつもりである。

寺本 孝子

花鳥風月を楽しむ身の程の暮らし〜〜という言葉が好きで里山の暮らしに興味を持ち、もっと知りたいという願望を持ち、里山守り隊！に入りました。藍那の里にはまさに昔ながらのライフスタイルが受け継がれており、むだのない生活がありました。

植物を愛でる、水を汚さない、物に執着しない、余暇を遊び楽しむ、平穩無事な暮らし、以上をモットーにして次世代を担う子供たちに昔のよきライフスタイルを知って自然を大切に生活して欲しいと思います。

雑喉 良

一番おおきいのはグループとしての「次世代に続く里山を目指して」への思いの発展だと思う。

私は日本中で放置された里山を、ポスト大量生産・大量消費時代の化石燃料資源に代替ができ、未来へ再生可能で、余すことなく活用していける方法をこれからも推進していきたいと考えている。里山への近づき方にはいろいろな方法があるのだと思う。

「あいな里山」で里山と都市部の距離を近づけ、神戸市や兵庫県での里山問題や現実を共有し、里山をもう一度活性化していく提案を広めていける活動を進めていきたいと思っている。